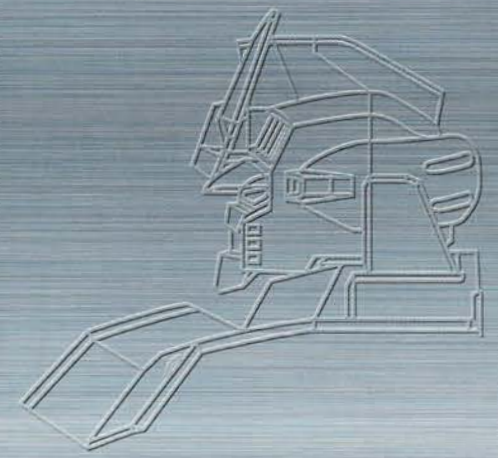




MOBILE SUIT
RX-78 GP02A

PHYSALIS

U.N.T. SPACY PROTOTYPE
TACTICAL MOBILE SUIT



地球連邦軍 戦術型 モビルスーツ
ガンダム試作2号機 RX-78 GP02A
1/100SCALE
マスターグレードモデル

GUNDAM RX-78 GP02A

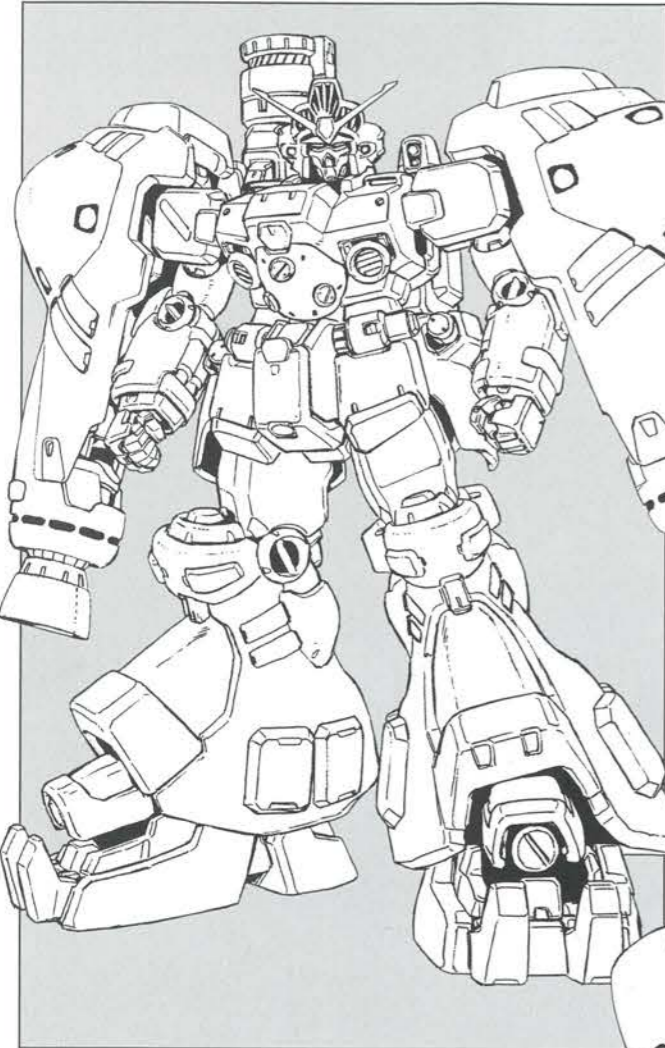
U.N.T.SPACY PROTOTYPE TACTICAL MOBILE SUIT



地球連邦軍 戦術型 モビルスーツ
ガンダム試作2号機 RX-78 GP02A
1/100 スケール
マスターグレードモデル

BANDAI 1998 MADE IN JAPAN



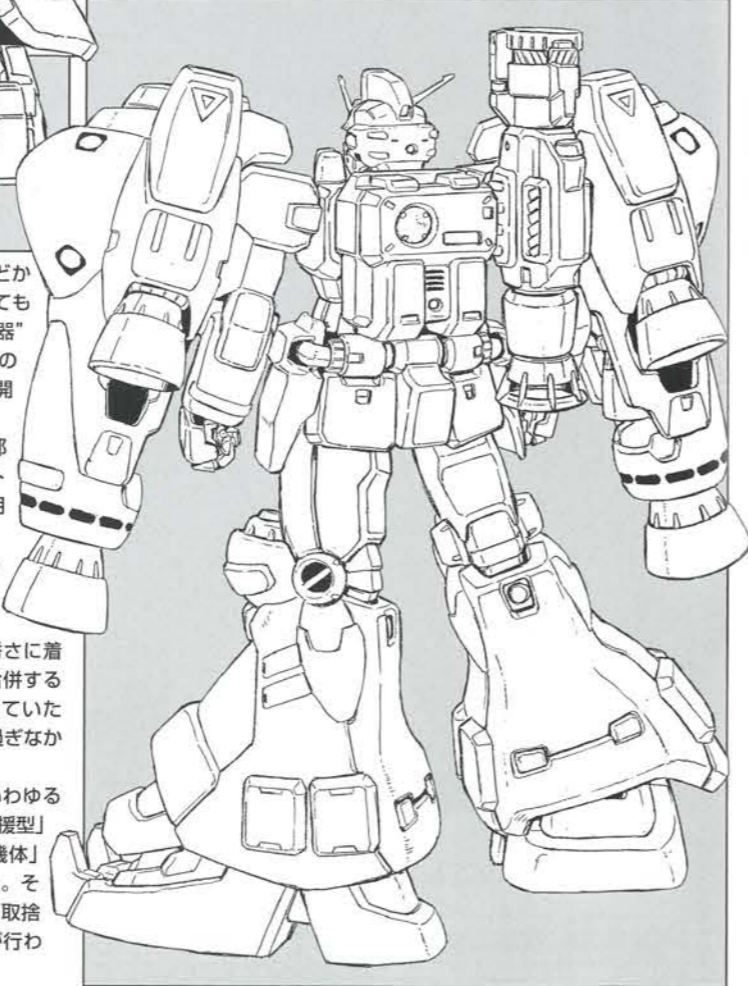


「ガンダム開発計画」は、連邦軍とA Eとの共同プロジェクトではあったが、基本的には、A Eが提出した数種の設計案が、ほぼそのまま承認されていた。その骨子は、戦争中に開発されたMSの系統を割り出し、その機能と運用目的を再検討した上で、進化、あるいは刷新された機体を新たに開発するというものであった。

MSの運用を根底から見直した結果、不可避免的に「核戦略」の概念が提示された。一年戦争においても、開戦から南極条約の締結に至るまでの間に公国軍と連邦軍を問わず核兵器は投入されていたし、条約の締結後も、核兵器の使用や、使用を前提とした未遂作戦などがあったからである。しかし、現実的には、ミノフスキー粒子によって、既存のあらゆる誘導兵器の確実な運用は不可能となっていた。抑止力、ことに自動報復装置としての戦略核は、すでに事実上の実効性を喪失していた。軍事的側面に限って言えば、「核兵器」に残されたものは、その圧倒的な破壊力のみだったのである。

前線で消耗戦を展開するよりも、敵の拠点を一挙に破壊できた方が効率的であるとは言うまでもない。戦略核を恫喝や牽制の手段として用い、反抗勢力を封殺しようというのは、旧世紀以来の伝統的な戦略でもある。単純に「敵性勢力の殲滅を企図する」ことが軍事行動の要諦であれば、圧倒的な破壊力を機動兵器に付帯しようという発想は、ごく自然なものだといえるだろう。何より、「最強」を謳う根拠として強力な説得力を持つことは否定できない。だからこそ、「誘導式の飛翔体に頼らずに核兵器を確実に運用することが可能な機動兵器」が提案された。その機体こそ、RX-78GPO2Aである。

RX-78 GPO2A PHYSALIS



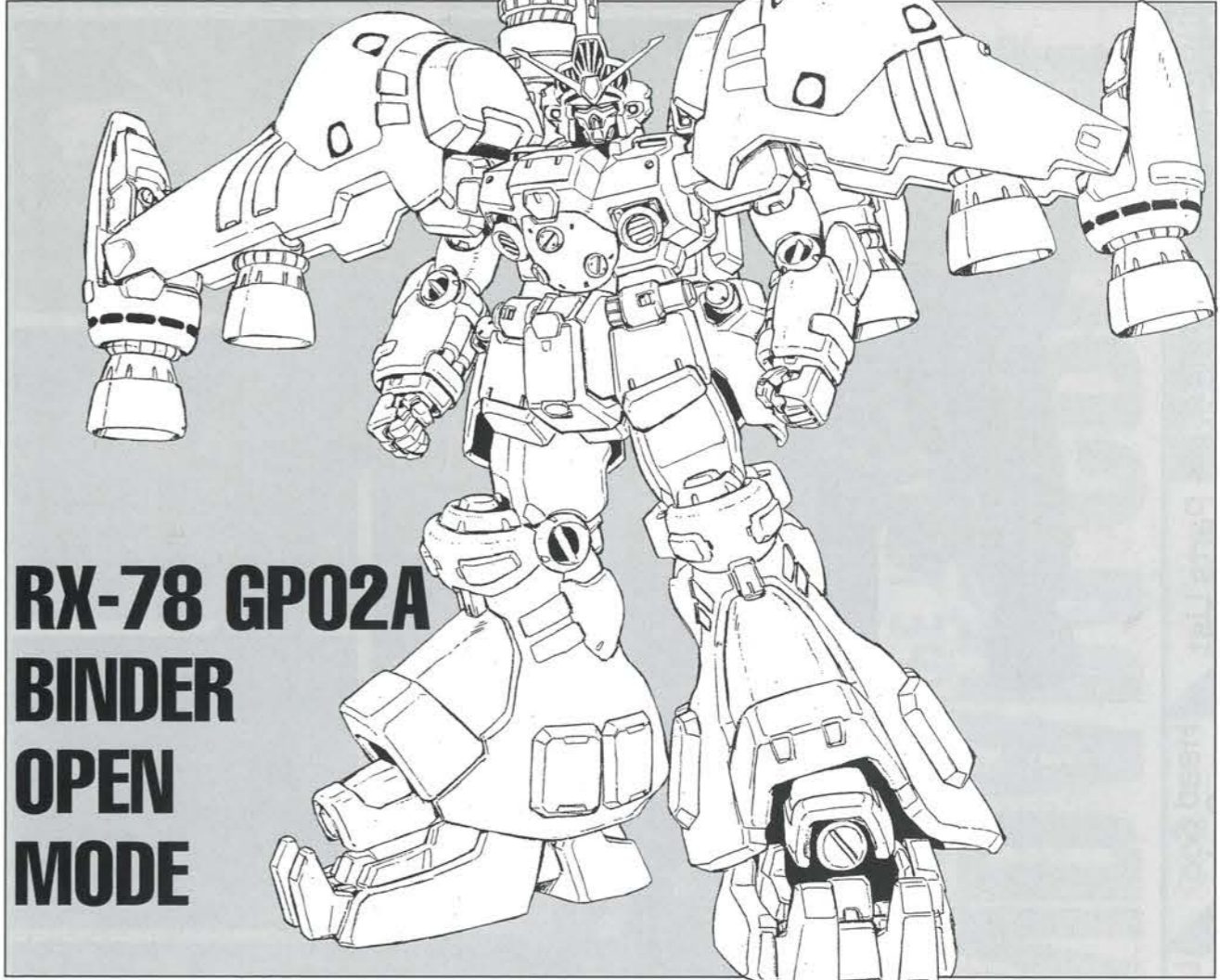
Conceptual illustration : Hajime-Katoki

U.C.0081年初頭、接收した公国軍製MSの運用や開発資料などから技術格差の是正を達成した連邦軍は、MSの設計や生産に関してもある程度の到達点に達していた。そして、MSという「機動兵器」そのものも、新たな模索の時期に入っていた。連邦軍は、MSの「運用」そのものを再検討し、連邦軍の基本戦略に即したMSの開発が提案された。それが「ガンダム開発計画」である。

この計画は、「連邦軍再建計画」の一環として認めを受け、連邦軍のジョン・コーウェン中将管理のもと、アナハイム・エレクトロニクス（以下A E）の全面的な協力を得て、U.C.0081年10月20日、極秘裡にスタートした。

A Eは、家電製品から軍用航空艦艇、さらには、コロニー用の建築資材まで生産する巨大企業であり、一年戦争当時、その影響力の大きさから、公国軍でさえ接收を控えた程の一大コングロマリットであった。A Eは、戦後いち早くMSの兵器としての優秀さに着目し、公国の主幹MS生産メーカーのジオニック社などを吸収合併することで、地球圏最大のMS開発生産能力を持つ軍需産業となっていた（それでもMS開発部門は、A Eにとっては膨大な業務の一部に過ぎなかったのである）。

一年戦争の期間中に開発されたMSは、おおむね「万能型（いわゆるガンダムタイプ）」「高機動型」「強襲型」「格闘型」「中、長距離支援型」などに分類される。さらに連邦軍からは「最強の機動兵器たる機体」「必要な機能を全て盛り込んだ機体」といった指針や要望もあった。そして、これらのカテゴリーやコンセプトを組み合わせ、あるいは取捨選択し、運用が想定される領域に応じて実際の設計および試作が行われることとなったのである。



RX-78 GPO2A BINDER OPEN MODE

U.C.0083年9月18日。「最強の攻撃力を持つMS」として開発されたRX-78GPO2Aがロールアウトした。この機体は「いかなる環境、状況であっても、敵およびその拠点を撃滅する」ことを目的とする強襲用の機体であった。運用に膨大な物理的手続きが必要なコロニーや小天体などの質量弾を別にすれば、宇宙世紀においても、最強の兵器は「核」であった。その戦略上のインパクトは、他の兵器の追従を許さない。この機体には、その核兵器が搭載されている。いわば、初の戦略級のMSである。まさに「最強最悪の破壊兵器」を搭載した機体だといえる。

核兵器のあらゆる「使用」は、人類全体に対する重大な背任行為である。しかし、連邦軍首脳は、確信犯的に、必要悪としてこの機体を開発した。事実、公国軍は南極条約締結後も核兵器を使用しようとした。MSによって覆われてしまった兵器体系は、この時点においても未だ未知数の部分が多かった。戦後の優位性を維持するために、連邦軍内部で既存の概念が適用できる兵器の開発が検討されたのも無理からぬことだったのかもしれない。すなわちRX-78GPO2Aは、一年戦争後の体制の中で生まれた機体なのである。

この機体に装備されている核兵器は、戦術核として申請、登録され、書類上もそのように処理されているが、実際には、戦術核の数倍の威力を持つ弾頭が装備されている。宇宙世紀の核融合技術の粋が凝らされたこの弾頭は、試算によると、当時の連邦軍宇宙艦隊の三、四割を破壊できるという。ただし、弾頭の到達半径が短いため、核を使用した場合、自機も爆心付近になることになる。そのため、専用シールドには冷却設備が施され、全ての装甲は、耐熱、耐衝撃処理されている。

核バズーカ使用時は、シールドからバレルを取り出し、基部に装着する。背部には弾頭の貯蔵、発射装置があるため、機体の機動を司るスラスター類は肩に装備されたフレキシブルスラスターバインダーに集約して設置されている。このユニットの総推力は膨大であり、重力下においてもホバー走行が可能なのである。これらの装備を稼働させるため、機体には新開発の高出力のジェネレータが装備されている。そのため、通常の機体をはるかに超える過剰な装甲を持ちながら、既存の重MSとは比較にならないほどの運動性をも獲得しているのである。

最も初期の設計案による「RX-78GPO2」は、いわゆる「ドム」系の重MSであったともいわれている。すなわち、強固な装甲と強力な火力を具え、敵陣深く侵攻して拠点を要撃するという、既存の「強襲/攻撃型MS」そのものだったのである。重力下でホバー走行が可能なのはその名残だと考えることもできるだろう。そして、設計の途上で運用する武装のバリエーションの検討が行われた。すなわち、徹甲弾や炸裂弾に始まり、ビーム攪乱幕散弾やプラズマリーダーを射出する多弾頭弾などが提案された。そういった模索の進捗に伴って、ある意味、当然の帰結として核装備の可能性が検討された。なにしろ核弾頭そのものはザクバズーカでも射出可能なのである。

もともと連邦軍首脳部は長く大艦巨砲主義に固執していたし、MSが戦闘の主力となったことは了解していても、依然として戦略核による「抑止力」の有効性を信奉し続けていた。これはつまり、MSをミサイルに代わる核弾頭運搬装置として運用しようという発想である。

そしてU.C.0083年11月10日。その発想が正しかったことは、皮肉にも彼ら自身が身をもって証明したのである。



U.C.0079年12月31日。一年戦争終結直前、信奉するギレンがキシリアによって謀殺されたことを知ったエギーユ・デラーズは自らを率いる艦隊を率いて戦線を離脱。暗礁宙域に繁留基地「茨の園」を設営。デラーズ・フリートを結成し、ジオン再興を期していた。

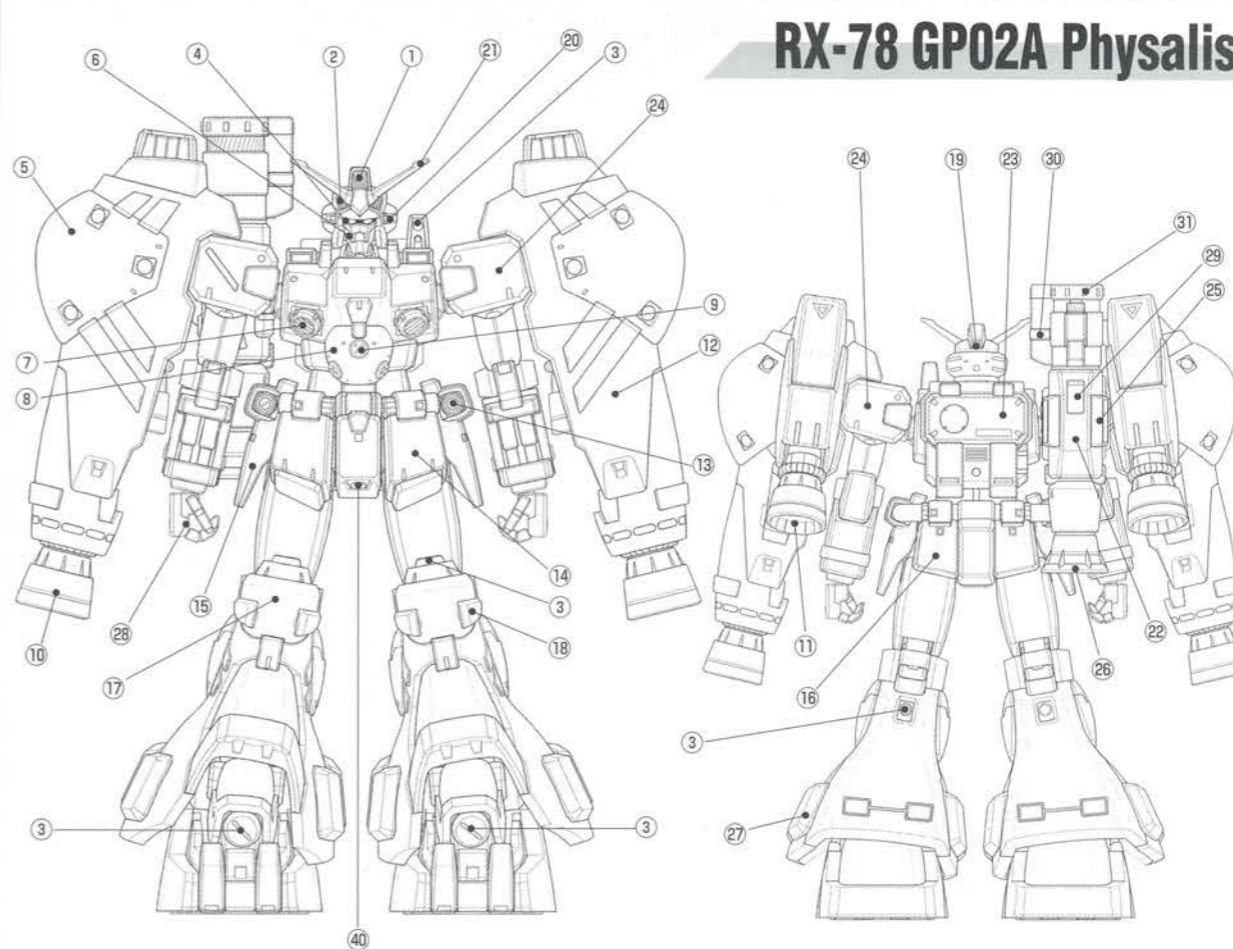
U.C.0081年10月20日。連邦軍は、一年戦争時において優秀な戦績を残した「ガンダム」を指標とし、更なる高性能MSの開発、試作を推進する極秘プロジェクトとして『ガンダム開発計画』を始動した。しかし、その計画の存在を察知したデラーズは、それを利用して一大反攻作戦「星の肩作戦」を立案した。

U.C.0083年10月13日。かつて「ソロモンの悪夢」と異名をとった公国軍屈指のエースパイロット、アナベル・ガトーは、オーストラリアの連邦軍トリントン基地を襲撃。搬入されたばかりのGP02Aを強奪した。

“最強の攻撃力を持つMS”として開発されていたGP02Aは、強力な核弾頭を実装していた。これは連邦による人類への重大な背信行為である。デラーズは、この機体を強奪することによって、圧倒的な戦力の獲得と共に、自らの正当性を手に入れ、連邦の不実をアピールしようとしていた。トリントン基地を壊滅させたGP02Aは、連邦軍の追撃を振り切り、アフリカの公国軍残党の支援を得て、遂には茨の園へ帰投する。

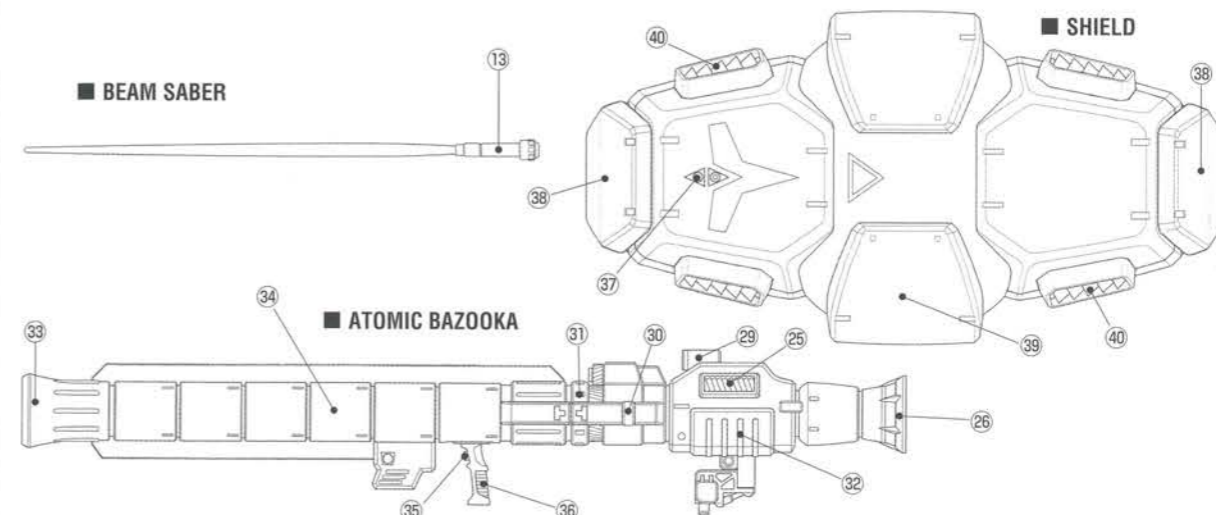
そして同年11月10日。デラーズ・フリートは、4年ぶりに行われた連邦軍の観艦式をGP02Aによる核攻撃によって襲撃。連邦艦隊に甚大な被害を与えることに成功した。しかし、任務を完遂し、艦隊へ帰還しようとするアナベル・ガトーの前に、トリントン基地での雪辱を期すコウ・ウラキが、GP01Fbを駆って立ちはだかる。ガンダム対ガンダムの戦いの行方は……!?

RX-78 GP02A Physalis



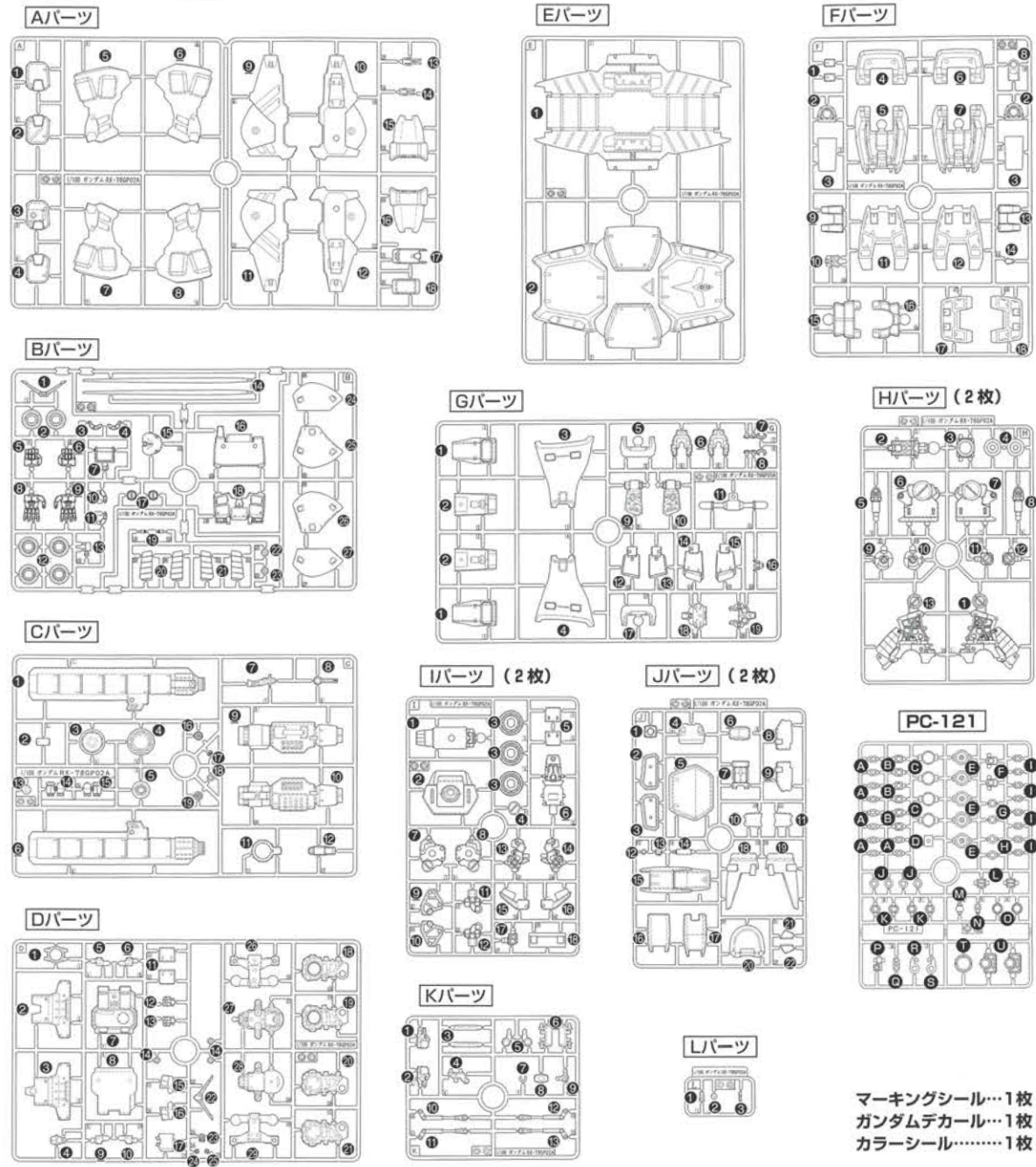
- | | | | | |
|--------------------|------------------|-------------------|---------------|----------------|
| ①メインカメラ/ディフェンジャー | ⑨シーリングボルト | ⑰ニーアーマー | ⑳サブダクト | ㉓マズル |
| ②インテークシャッター | ⑩メインスラスタ | ⑱サブスタンスコントロールシステム | ㉔メインダクト | ㉔バレル |
| ③サブセンサー | ⑪サブスラスタ | ⑲リアカメラ/センサー | ㉕アングルサポートユニット | ㉕トリガー |
| ④デュアルセンサー | ⑫フレキシブルスラスタバインダー | ㉖60mmバカソディフェンジャー | ㉖マニピュレーター | ㉖グリッパ |
| ⑤プロベラントプロテクションアーマー | ⑬ビームサーベル | ㉗通信用ブレードアンテナ | ㉗サイトユニット | ㉗マルチセンサー |
| ⑥耐熱耐衝撃フェイスガード | ⑭フロントアーマー | ㉘チャンパー | ㉘ターゲットスコープ | ㉘バレルホルダー |
| ⑦耐熱耐衝撃インテーク | ⑮サイドアーマー | ㉙弾頭貯蔵バイル | ㉙ロックングリング | ㉙耐熱耐衝撃冷媒保護アーマー |
| ⑧耐熱耐衝撃コクピットハッチ | ⑯リアアーマー | ㉚ショルダーアーマー | ㉚ショルダーレスト | ㉚冷媒放出ダクト |

注) この機体はU.C.0083年10月にオーストラリアの連邦軍トリントン基地に搬入後、各封印を解除した上でMK-82弾頭を実装した状態のものです。後にデラーズ・フリートによって改装されました。



パーツリスト

[使用材質]<成形品>(スチロール樹脂:PS)、(ABS樹脂:ABS)、<ポリキャップ>(ポリエチレン:PE)

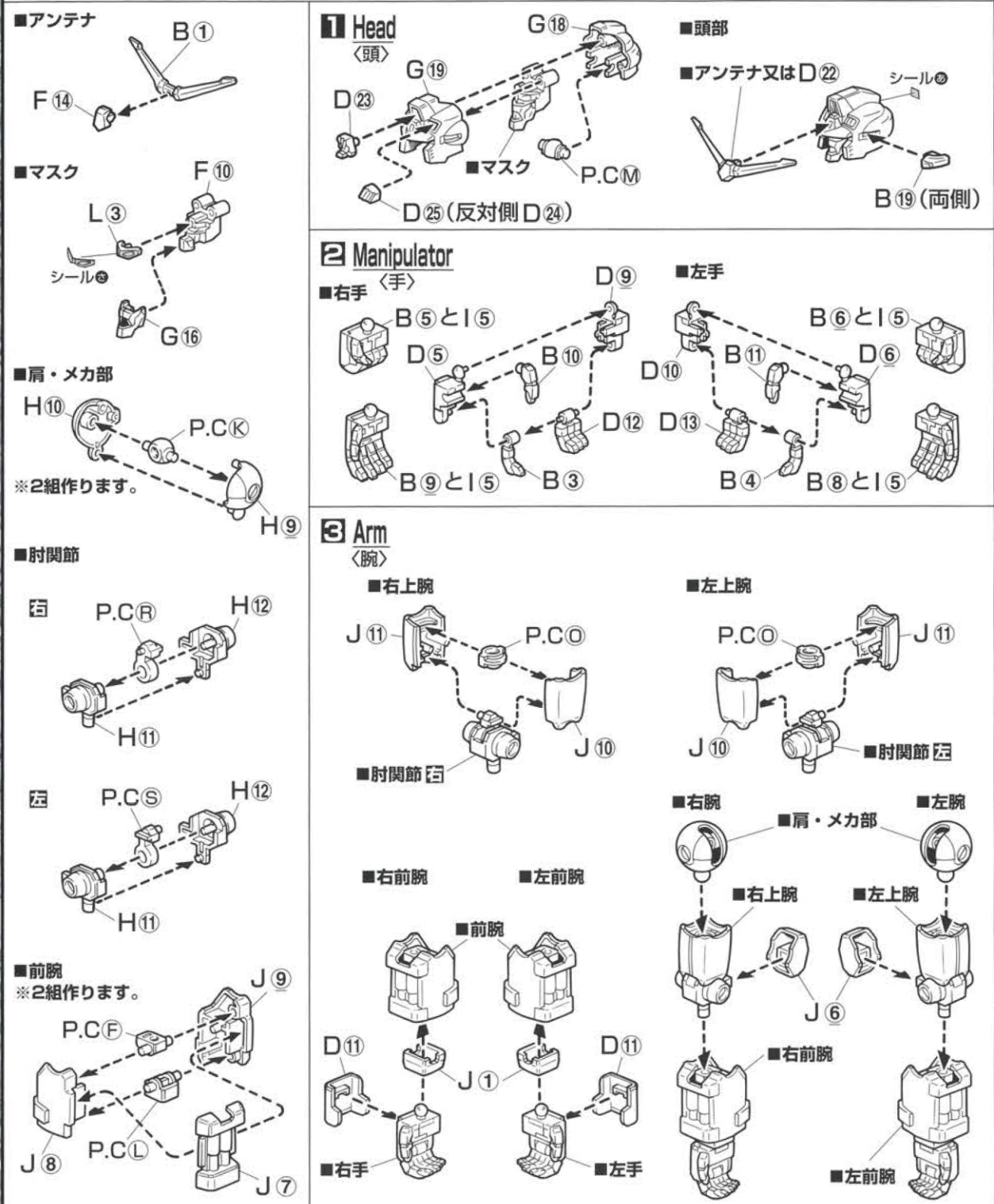


マーキングシール...1枚
ガンダムデカール...1枚
カラーシール.....1枚

注意

お買い上げのお客様へ必ずお読みください。
●本商品の対象年齢は15才以上です。対象年齢未満のお子様には絶対に与えないでください。
●小さな部品がありますので、小さなお子様が入って飲み込まないように注意してください。窒息などの危険があります。
●ビニール袋を頭からかぶったり、顔を覆ったりしないでください。窒息する恐れがあります。
●尖った部分や鋭い部分がありますので、取り扱いや保管場所に注意してください。思わぬケガをする恐れがあります。

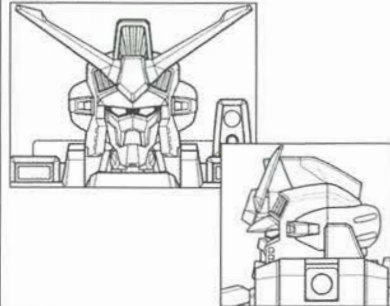
<組み立てる時の注意>
●組み立てる前に説明書をよく読みましょう。
●部品は番号を確かめ、ニッパーなどできれいに切り取りましょう。
●部品の加工の際の刃物、工具、塗料、接着剤などのご使用にあたっては、それぞれの取扱説明書をよく読んで正しく使用してください。
●塗装には、より安全な「水性塗料」のご使用をおすすめします。
●尖った先端や薄い線端部に触れながらの組み立てには十分ご注意ください。
●ABS部分への塗装は破損する恐れがありますので、塗装はおすすめできません。



HEAD PARTS

HU-0078GP02 Serial 000276

GP02Aに搭載される光学端末は、GP01とほぼ同じもので、基本性能もほとんど同じである。ただし、核使用時にはメインカメラ等が使えなくなるため、さらに強固な耐熱耐衝撃処理と、機能追加が施されている。



RX-78GP02Aの頭部に装備されている基本パーツやモニターリング用のセンサー類は、ほぼGP01と同等のもので、基本設計案であるGP02の頭部ユニットに耐熱、耐衝撃装備を施した上で再設計されたものである。

GP02Aのメインコンピュータは基本的にコクピット部分に搭載されており、頭部ユニットを副的なコ・プロセッサフレームとするコンセプトもGP01と同様である。ただし、機体の性格上、高濃度のミノフスキー粒子のみならず、強力な核バリスを浴びることが想定されるため、さらに強力な防護手段が講じられている。それは頭部のコ・プロセッサも同様で、各端末も核使用時には物理的、電氣的に外部から遮断される構造となっているため、所謂ガンダム系の頭部とは異なった外観を持つ。

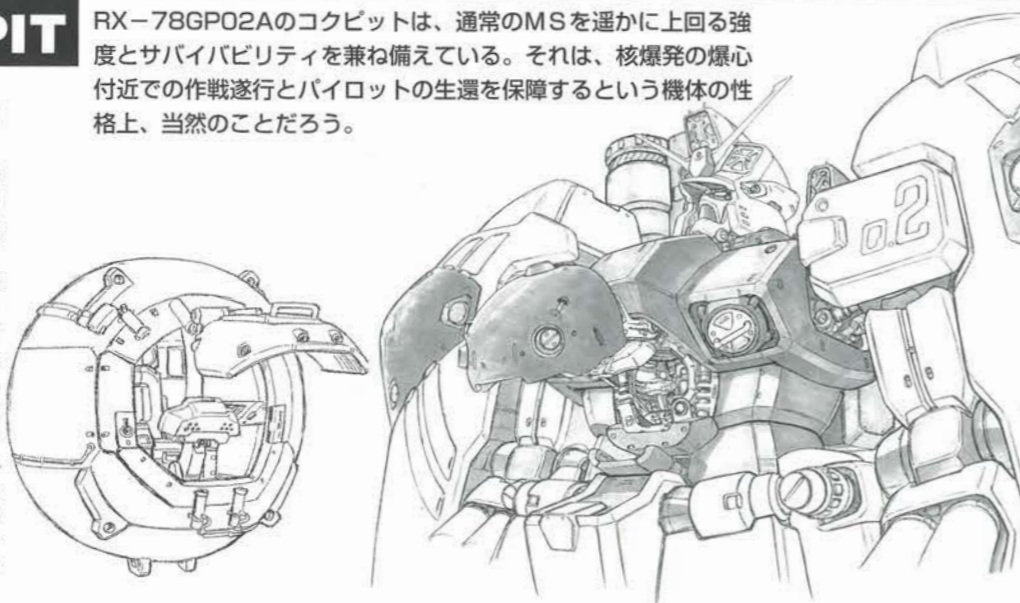


COCKPIT

RX-78GP02Aのコクピットは、通常のMSを遥かに上回る強度とサバイバビリティを兼ね備えている。それは、核爆発の爆心付近での作戦遂行とパイロットの生還を保障するという機体の性格上、当然のことだろう。

コクピット構造図

GP02Aのコクピットは、一年戦争末期に提案された球形コクピットのコンセプトを継承し、更なる構造強化が施されている。そして、胸部と腹部の構造材から装甲、コクピットハッチに至るまで、何層にもおよぶ複合装甲と緩衝材が幾重にも重ねられている。コクピットそのものにも強力な減速材が充填されており、パイロットの被爆を防いでいる。非常時には爆裂ボルトを起動させ、コクピットブロックそのものを射出することも可能。

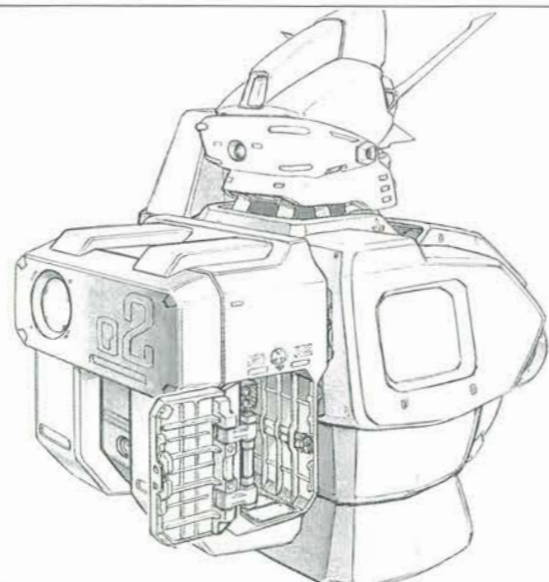


BACKPACK

通常のMSのほとんどは背部に機動用の装備を持つが、RX-78GP02Aでは弾頭貯蔵及び輸送のための装備となっている。つまりこの機体は、核を使用するまで弾頭を安全に輸送するという任務も負っているのだ。

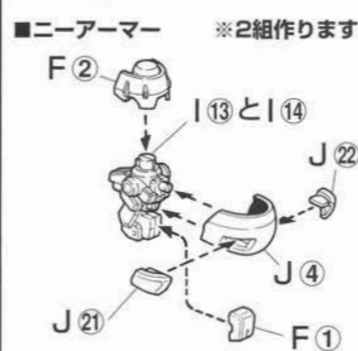
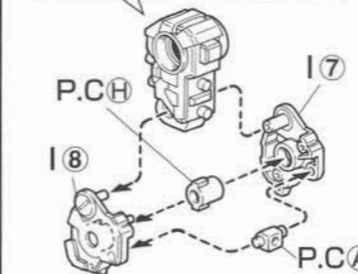
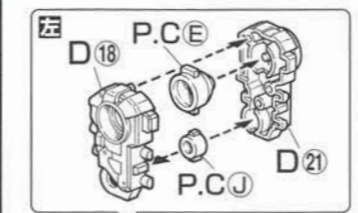
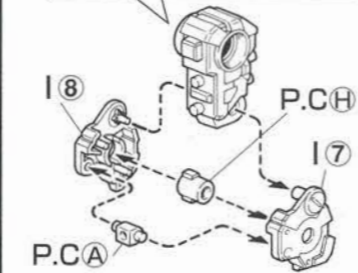
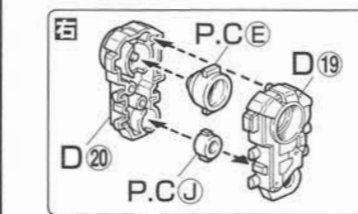
GP02Aは、既に設計の段階で核兵器を使用する機体とされたため、機動兵器でありながら、核弾頭の貯蔵、輸送、射出システムとしての機能が求められることとなった。それは逆に、使用するまで絶対に弾頭の機能が損なわれないということも意味する。弾体が分割されているのはそのため、起爆装置にも何重ものプロテクトが施されている。本来なら、正規の手続きを経なければ、射出状態にすることさえできない。

Mk-82弾頭

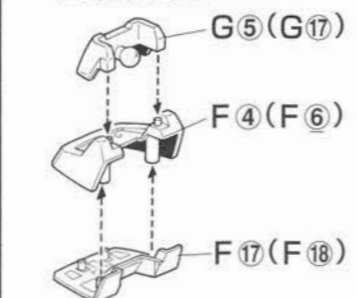


Mechanism illustration : BEE-CRAFT

■モモ・メカ部

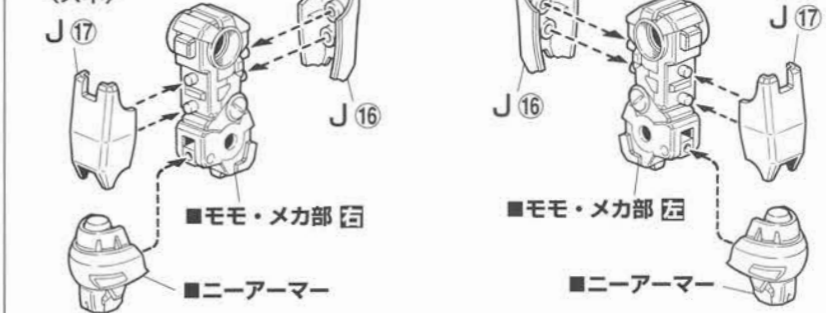


■カト ※2組作ります。

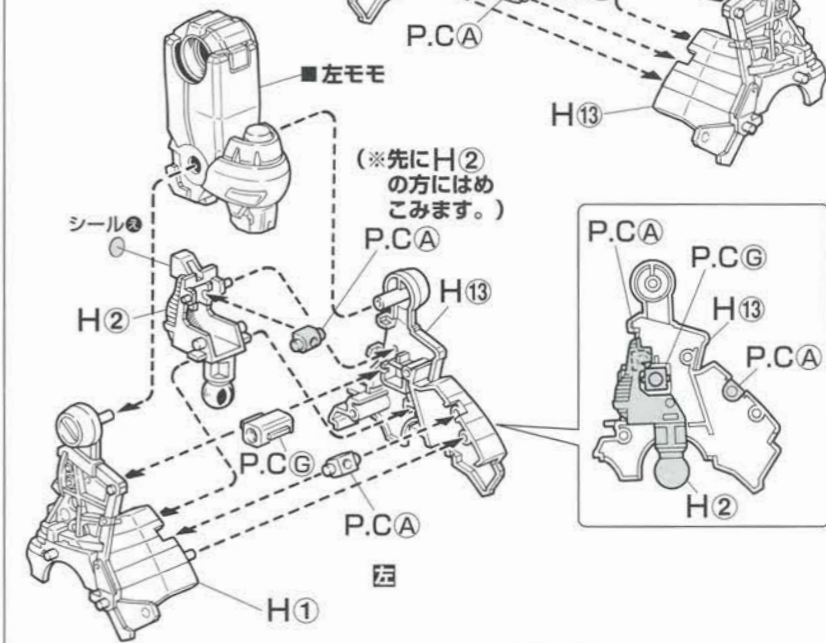
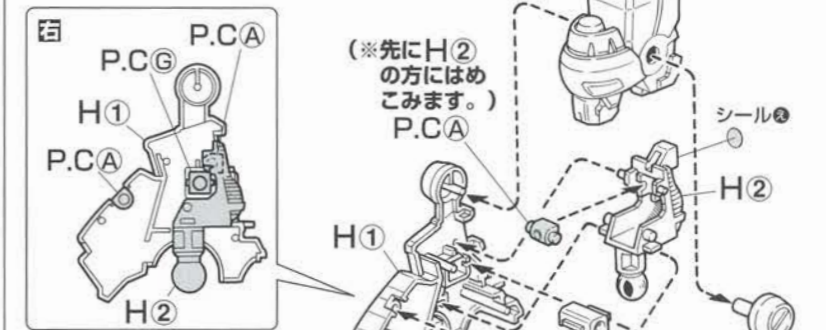


4 Leg

<スネ>



■スネ・メカ部



5 Ankle/1

<足首1>

■アングルカバー ※2組作ります。



■つま先 ※2組作ります。





PHYSALIS

1年戦争に勝利した連邦軍は「連邦軍再建計画」の一環としてRX-78を上回る高性能機開発プロジェクト「ガンダム開発計画」をAE（アナハイムエレクトロニクス）においてスタートさせた。「最強の機動兵器の開発」を目標とするこのプロジェクトによって開発された機体は、まず、MS単体の徹底的な高性能化を目標とした試作1号機と、最強の攻撃力を持つMSとして開発された試作2号機の二体が先行してロールアウトし、重力下試験のため、オーストラリアの連邦軍トリントン基地に搬入された。ところが、この計画を察知したジオン公国軍残党「デラース・フリード」によって、試作2号機と呼ばれるGP02Aが強奪されてしまった。この機体は、最強の攻撃力を持つ機体として開発されたため、戦略核並みの破壊力を持つ核弾頭が実装されていたのである。

TRINGTON BATTLE

GP02Aを強奪したデラース・フリードのパイロット、アナベル・ガトーは、1年戦争当時、連邦軍の兵士たちから「ソモンの悪夢」と恐れられたエースパイロットであった。アナハイム・エレクトロニクスの内通者に導かれ、トリントン基地に搬入した彼は、満を持してこの機体を奪ったのである。ガトーの機体強奪とともに、潜伏していたデラース・フリードの地上部隊が行動を開始した。サメルやドム・トロウベンの襲撃によって混乱に陥ったトリントン基地は、瞬く間に戦闘能力を奪われていった。守備隊を一蹴したガトーは、そのまま宇宙への脱出を図るが、その行く手を阻む機体があった。それは、GP02Aとともに搬入された試作1号機、GP01であった。はたして、兄弟とも呼べる機体同士による、ガンダム対ガンダムの戦いの火ぶたが切って落とされた。

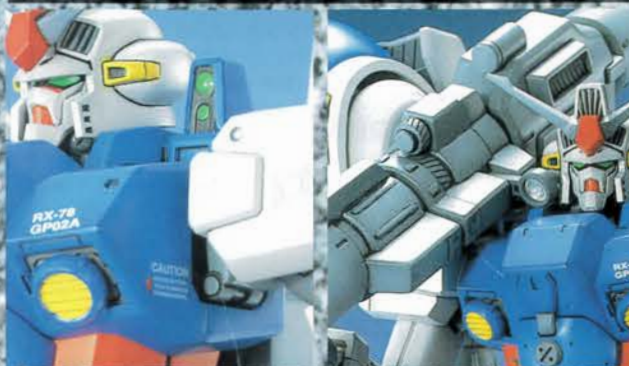


SOLOMON AREA

トリントン基地襲撃からおよそ一ヶ月の後、連邦が「コンペイ島」と呼ぶ旧ソモモン宙域において、連邦軍は4年ぶりに観艦式を挙行了。デラース・フリードが標榜する事実を隠蔽するために、そして、その大艦隊の威容によって反抗の意思を消えさせるために、しかし、デラースの推進する「星の肩作戦」は着実に進行していた。連邦の傲慢を象徴するかのようなこの観艦式こそ、デラースの待ち望んだ千載一遇の好機であったのだ。GP02Aに装備されるアクティフスラスタユニットと高出力ジェネレータは、その巨体にそぐわぬ高機動性と運動性をこの機体を与えていた。作戦行動の途上に遭遇したGP01Fbの追撃を振り切ったGP02Aは、勇躍、連邦艦隊の中核に鉄槌を下す。しかし、この大戦果さえも、「星の肩作戦」の一環に過ぎなかったのである。

MARKING

機体各部をリアルに再現するマーキングシールをセット。塗装するには、形式番号等のマーキングを要望の高いガンダムデカールで再現しました。



ATOMIC BAZOOKA



シールドに格納したバレルと、右肩背面のバズーカ機関部を結合するとアトミックバズーカになります。バズーカはジョイント部で切り離しが可能。バックパックコンテナのサイドカバーを開閉式で再現。アトミックバズーカに装填するMK-82弾頭を再現。

PAINTING

※よりリアルに仕上げたい場合は、下の基本色をご覧ください。
※塗装には、より安全な「水性塗料」のご使用をおすすめします。
●ABS樹脂部分への塗装は破損する恐れがありますので、塗装はお控えできません。

- 本体胸部部分などの塗装色。
コバルトブルー(60%)+インディブルー(40%)
- 本体胴、足などの塗装色。
モンザレッド
- 本体インテークやバインダーなどの塗装色。
黄橙色(80%)+白(20%)
- 関節部分やバズーカなどの塗装色。
フィールドグレー(1)(50%)+軍藍色(2)(50%)
- 本体、膝、脚などの塗装色。
ホワイト(90%)+フィールドグレー(1)(10%)



REAR VIEW



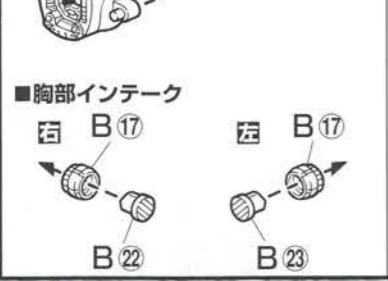
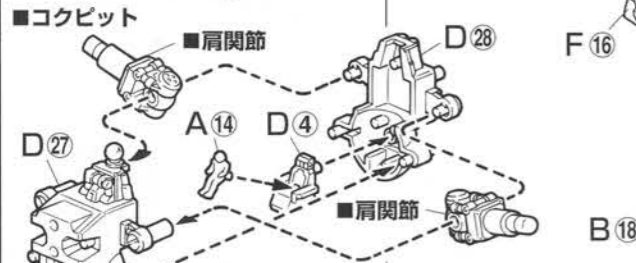
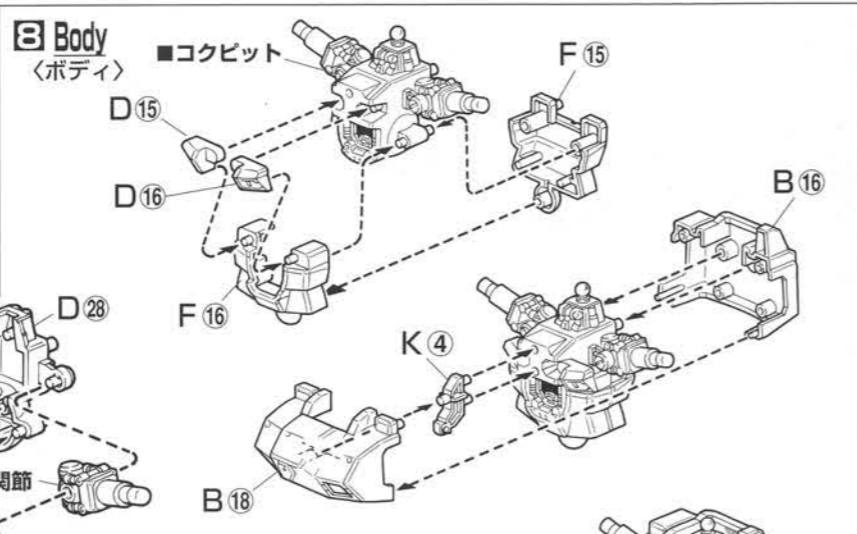
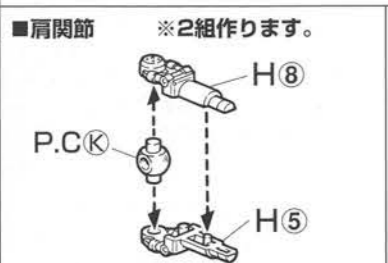
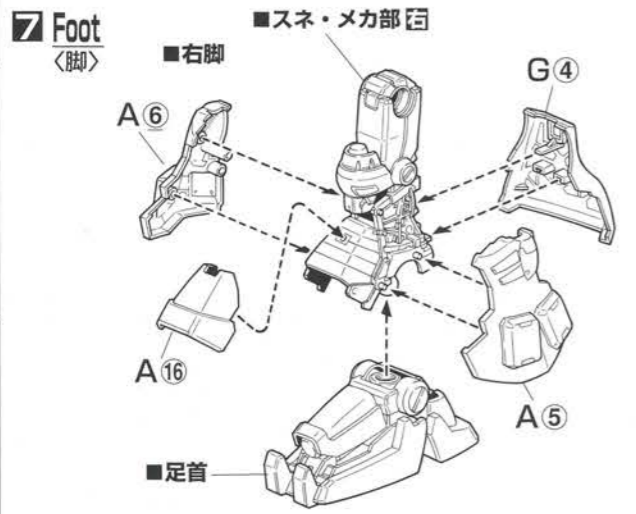
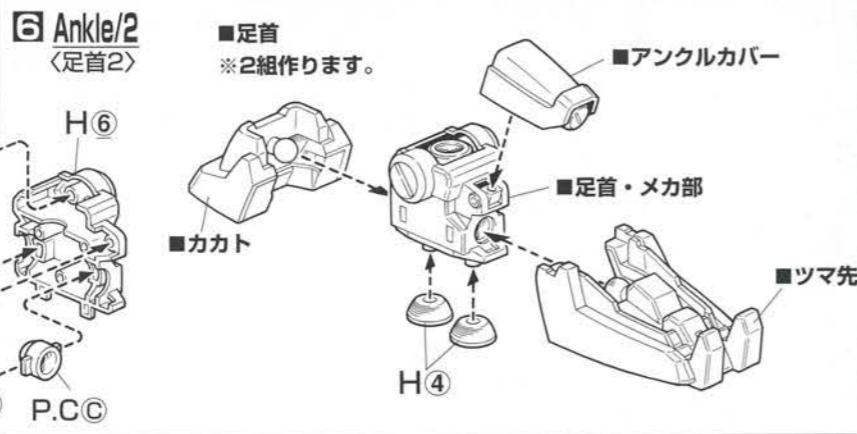
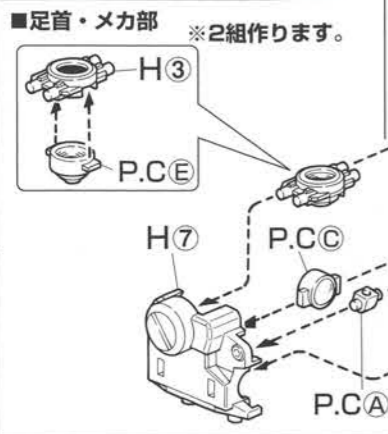
FRONT VIEW



◀コクピットハッチを開閉式でリアルに再現しました。
▶ヒザ関節を二重関節で再現。スネ部フレアスカート内のメカ部分もリアルに再現。

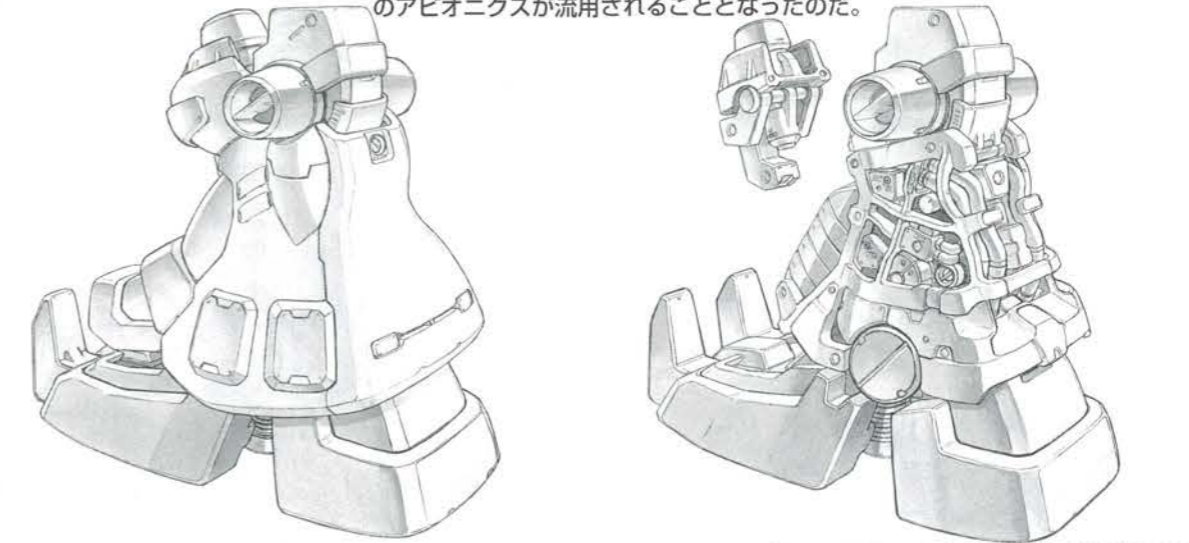


◀両肩のバインダーは先端と内蔵のノズル部分が連動して可動。バズーカ砲撃形態では、バインダーが可動して、肩部のスペースを確保。



LEG FRAME

GP02Aは、本来強襲用の重MSとして設計されていた。そのため脚部ユニットは空間用のプロペラントタンクか、あるいは重力下用のホバー装備が実装される予定であったという。その後、核弾頭の運用が開発の前提となった段階で、そのアビオニクスが流用されることとなったのだ。



GP02Aは、設計の初期段階で大幅なコンセプトの変更を受けている。標準的な「強襲用重MS」から、いわゆる「核装備の機動兵器」への転換である。その時点で、使用する弾頭の威力も算定されていたため、アトミックバズーカと専用シールドの仕様もほぼ決定していたのである。そして、その運用を前提とした作戦行動と戦闘シミュレーションを経て、その上でパイロットの生還が可能であることが必須とされた。

一年戦争の初期、ザクなどが使用した核弾頭は、ほとんどが「戦術核」並みの威力しかもたないもので、主に航空艦艇や軍事施設の破壊を目的としていた。つまり、直撃や爆心点付近にでもない限り、宇宙空間で活動し、なおかつ戦闘を行うことを前提に開発された通常のMSで十分に防護が可能レベルのものだったのである。しかし、この機体の使用する弾頭は「戦略核」レベルの威力を持っているため、それに応じた防護装備を施す必要があった。

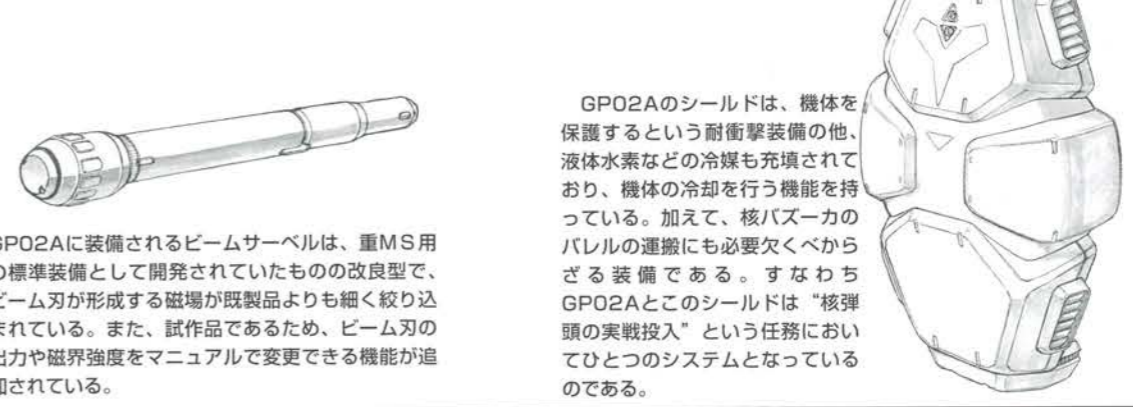
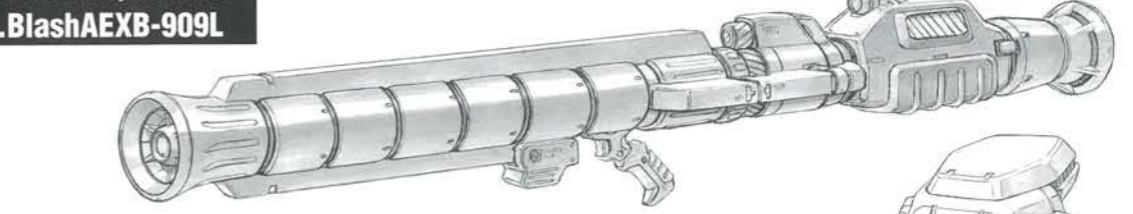
作戦遂行のため必携のシールドは、すでに携帯可能限界ギリギリの「小ささ」だったが、それでも脚部の防護はほぼ不可能であった。そのため脚部構造は独自にシールド並みの装甲が必要となり、同等の冷却装備も装備されている。そのせいか機体単体で見ただけかなり偏ったプロポーションとなっている。ところが、実際にはシールドとフレキシブルスラスタバインダーの装備などによって上半身の慣性質量が増大していたため、脚部は十分にバランスするスラスタユニットとして機能していた。つまり、機体のトータルバランスとしては、充分以上に実用レベルの運動性と機動性を獲得していたのである。

ちなみに、試作実験機群であるGPシリーズは、機体各所にモニタリング用の機器を装備しているが、その端末にはほとんど同じ部品が適用されている。特に膝部分のサブセンサーは、機体稼働のOSともリンクしていたためか、デラース・フリートに強奪された後も機能したままであったという。

WEAPONS

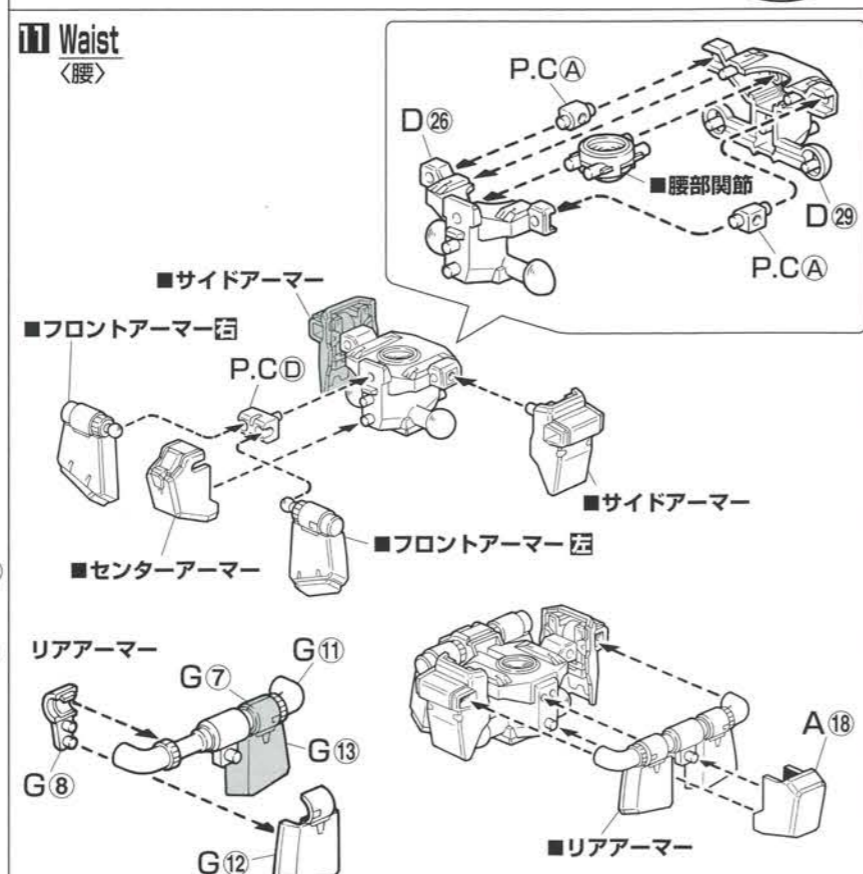
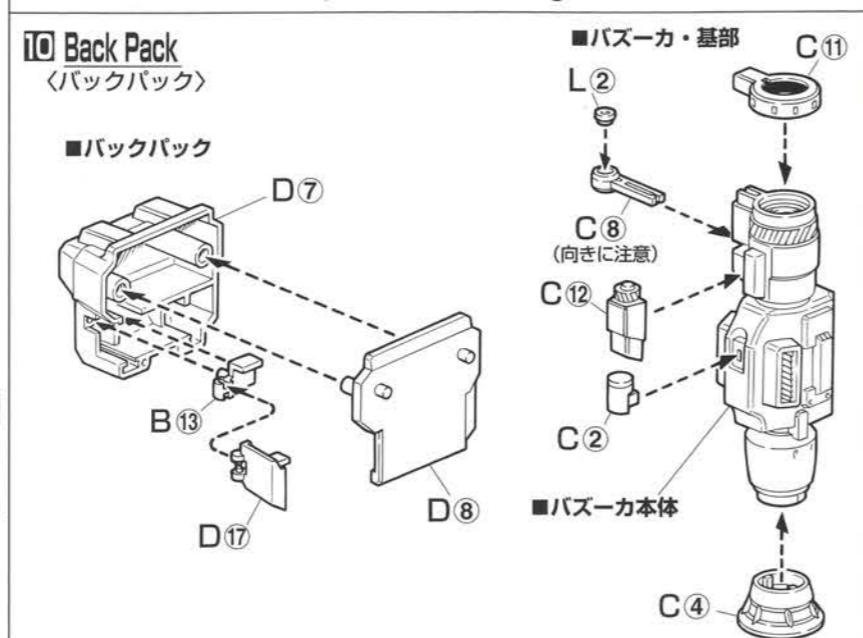
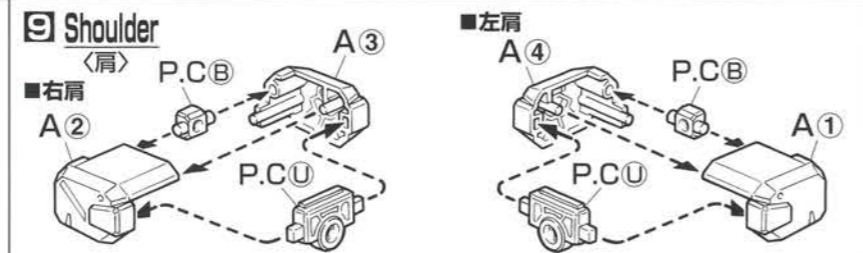
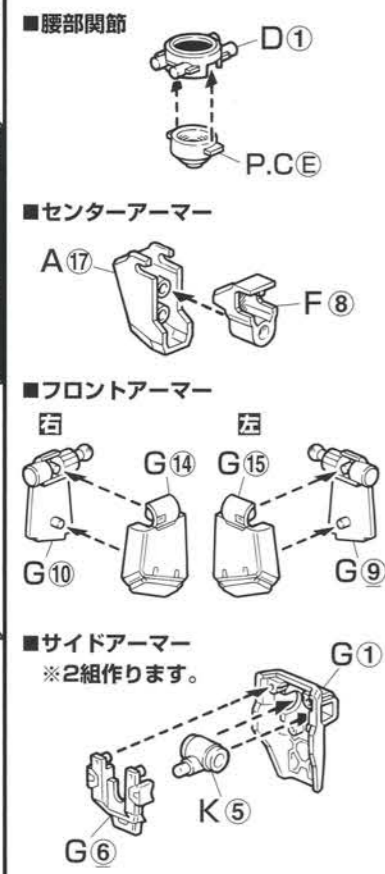
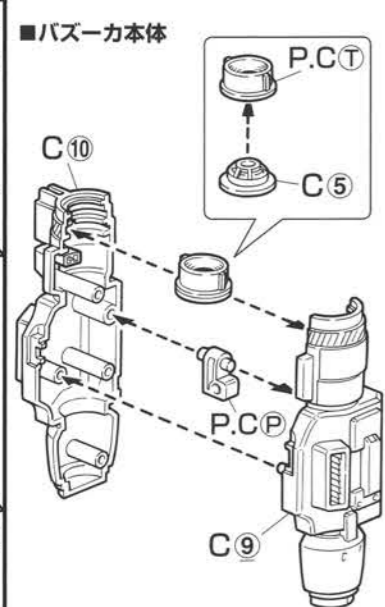
AE/ZIM.G-BAZ-0186-A
NR-Sh-02-RX/S-00013
A.E.BlashAEXB-909L

GP02Aの持つアトミックバズーカは、基本的には実体弾を正確に射出するための装備である。弾頭の推進そのものは、弾頭に装備されるロケットモーターが行うが、弾頭の安全装置の最終解除はこのバズーカでなければ不可能であり、初期加速と照準のためにも必要不可欠なものである。また、砲口のセーフティキャップも、射出寸前まで排除できない構造になっている。



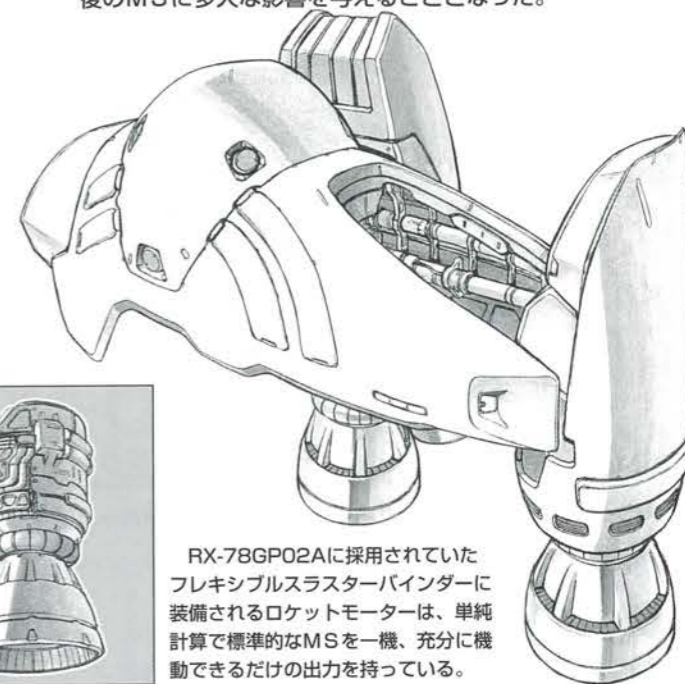
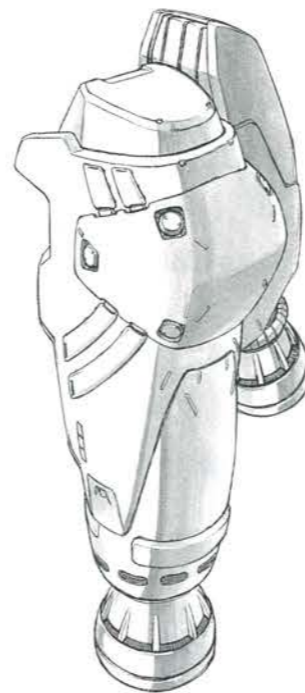
GP02Aに装備されるビームサーベルは、重MS用の標準装備として開発されていたものの改良型で、ビーム刃が形成する磁場が既製品よりも細く絞り込まれている。また、試作品であるため、ビーム刃の出力や磁界強度をマニュアルで変更できる機能が追加されている。

GP02Aのシールドは、機体を保護するという耐衝撃装備の他、液体水素などの冷媒も充填されており、機体の冷却を行う機能を持っている。加えて、核バズーカのバレルの運搬にも必要不可欠な装備である。すなわちGP02Aとこのシールドは「核弾頭の実戦投入」という任務においてひとつのシステムとなっているのである。



FLEXIBLE THRUSTER BINDER

フレキシブルスラスタバインダーは、RX-78GP02Aの最大の特徴である。MSによる戦略核の運用という未曾有の計画のために提案された装置は、文字通り圧倒的な機能を発揮し、後のMSに多大な影響を与えることとなった。



RX-78GP02Aに採用されていたフレキシブルスラスタバインダーに装備されるロケットモーターは、単純計算で標準的なMSを一機、充分に機動できるだけの出力を持っている。

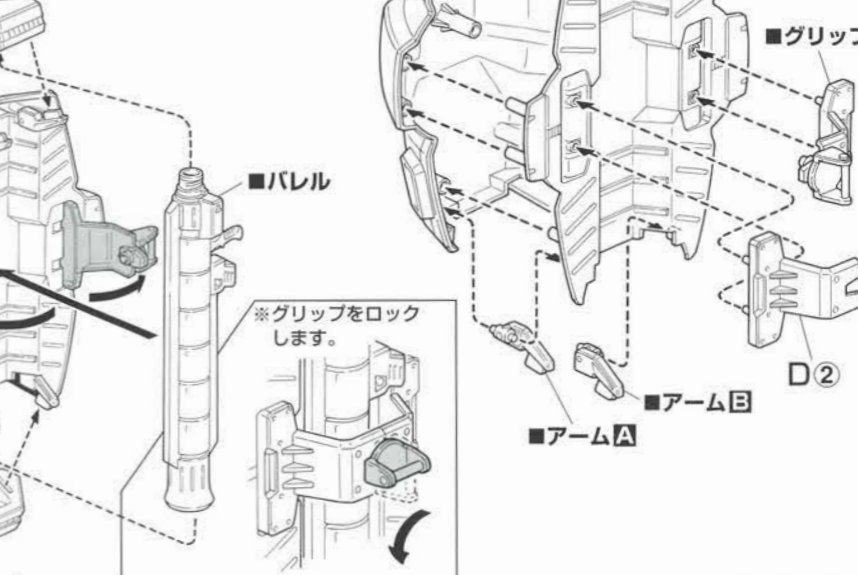
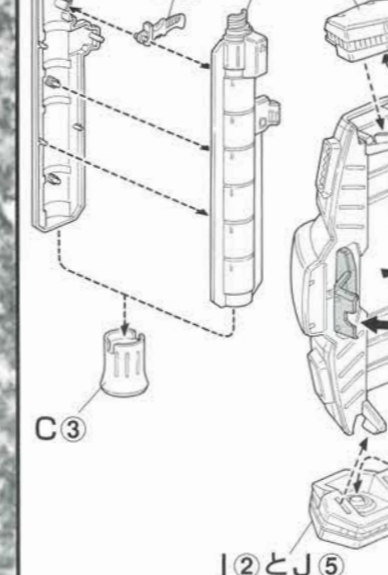
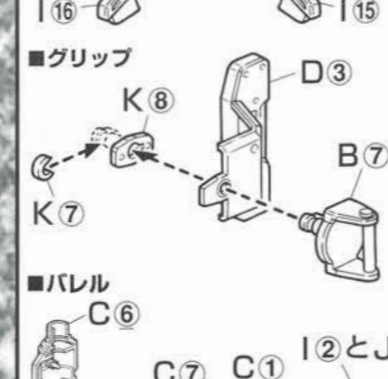
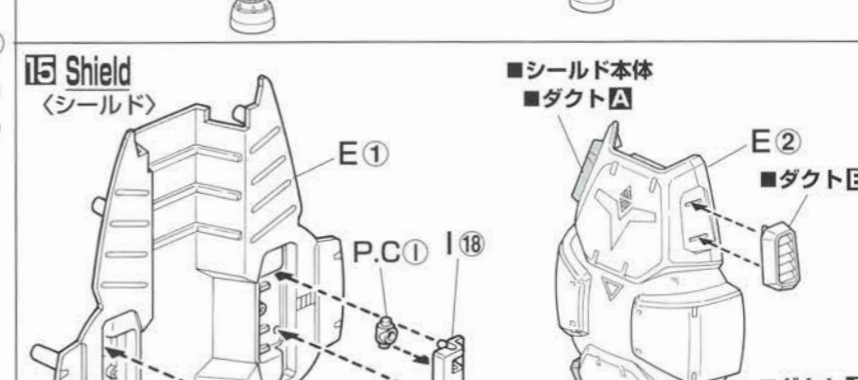
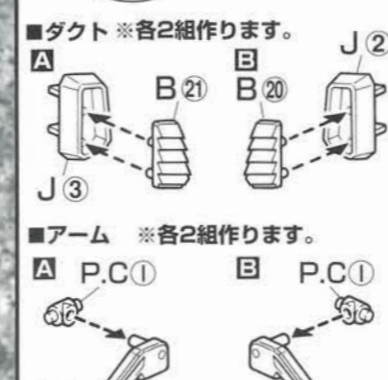
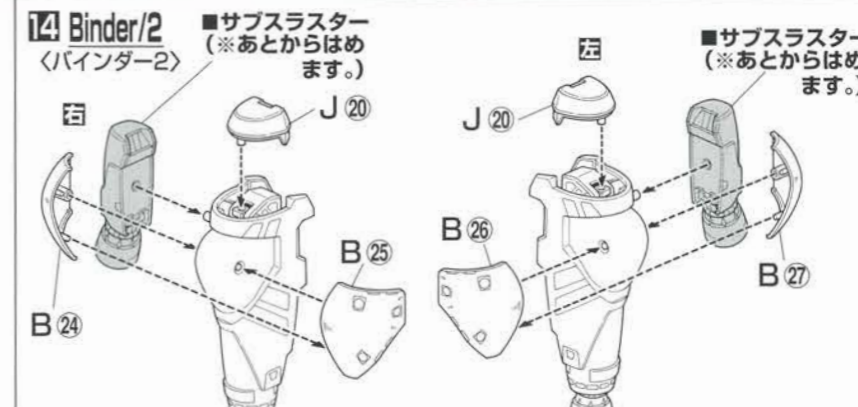
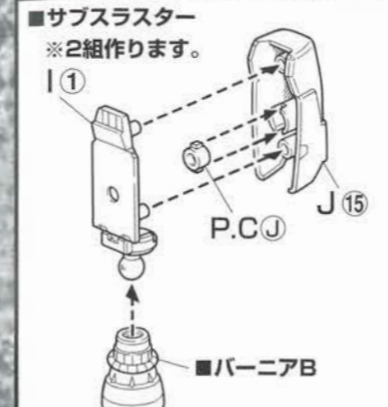
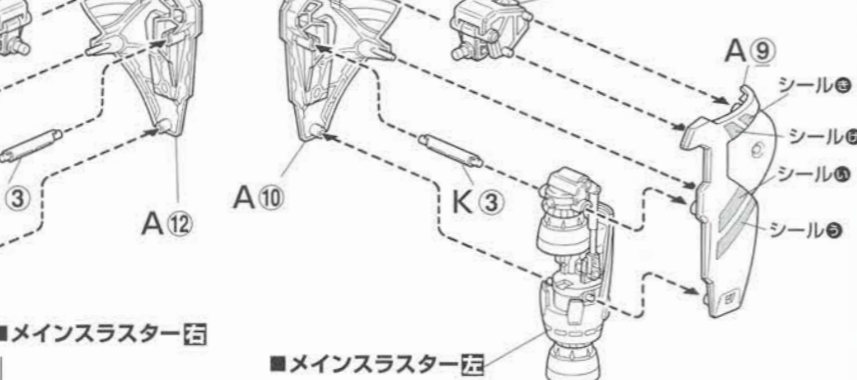
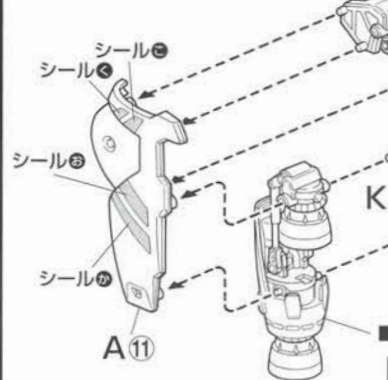
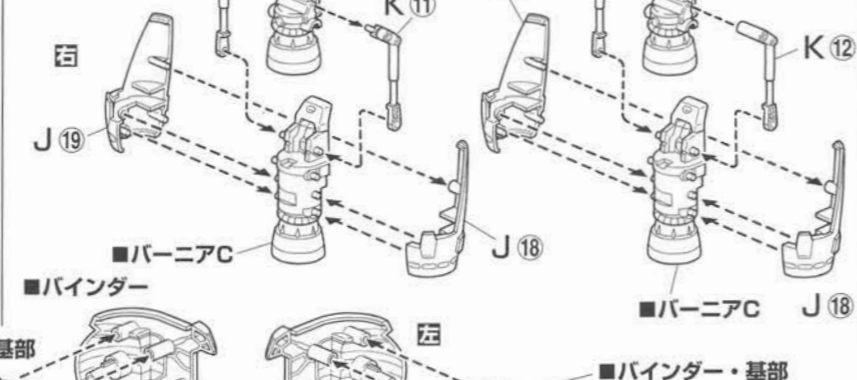
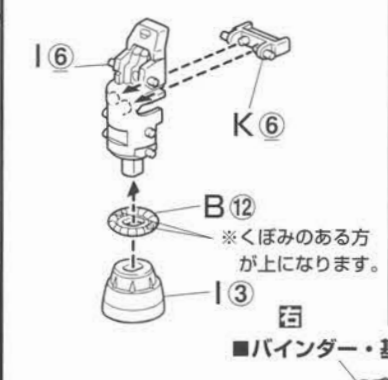
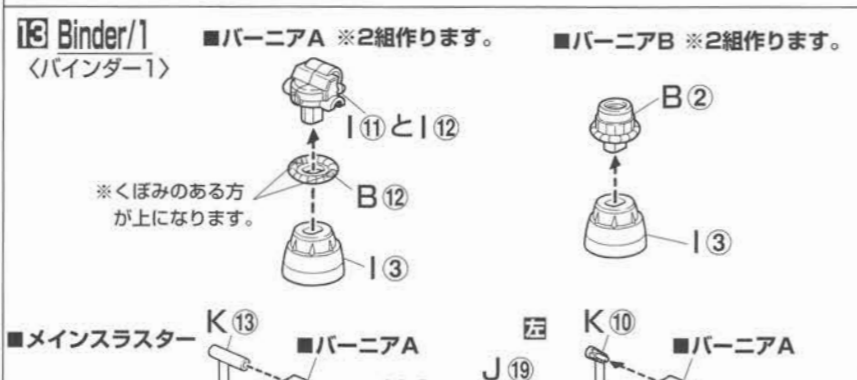
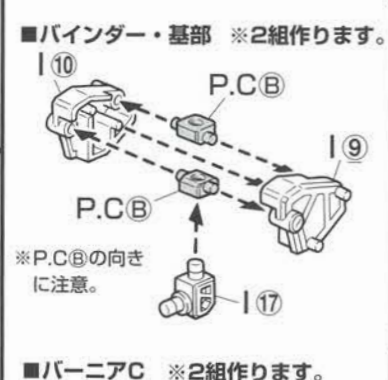
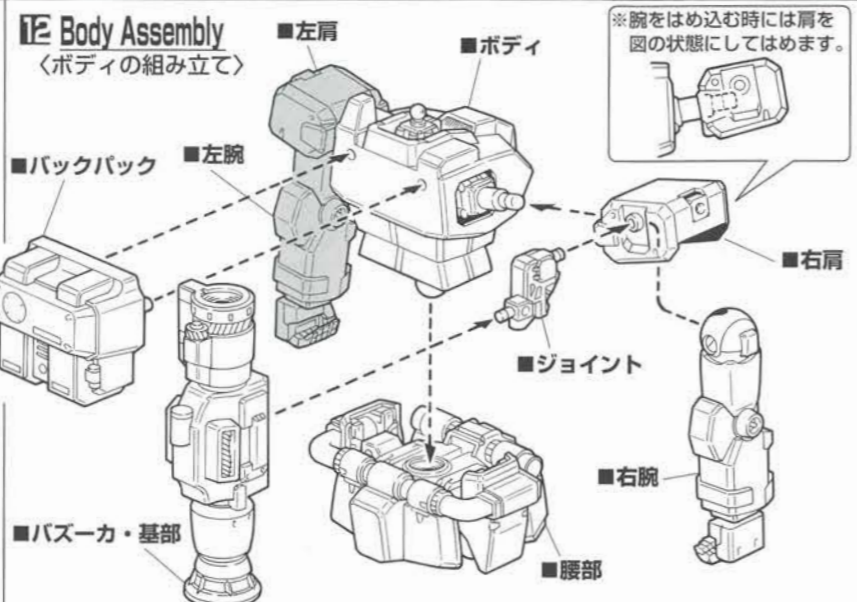
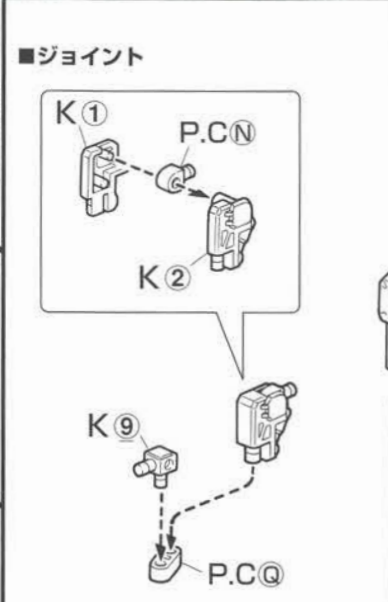
戦略核の運用を前提として開発されたGP02Aは、その過剰とも言える耐熱耐衝撃装備のため、サイズを超えた自重を持つに至った。それは、通常のMSのパワーウェイトレシオを無視したような破格のものであり、一年戦争当時であれば、この機体の実戦投入は、事実上、ナンセンスなものであった。

ところが、連邦軍と公国軍のテクノロジーが融合し、短期間のうちに技術革新が訪れた。そして、ジェネレーターやアクチュエーターなどの出力向上に加え、装甲材の軽量化や機体構造そのものの改善などによって、運動性そのものは確保することが可能となったのである。残る問題は機動性の確保のみとなった。しかし、この問題も単純な発想の転換で解決された。

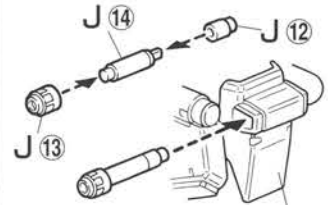
MSの四肢は、AMBACシステム（アクティブ・マス・バランス・オート・コントロール=能動的な質量移動による姿勢制御装置）として機能している。つまり、宇宙空間においては、腕や足があることによって姿勢制御に消費する燃料を節約でき、武装の交換が容易で歩行までできる。そして、多くの公国軍製MSのように、脚部そのものを可動式の巨大なスラスタユニットとすることで、機動性を飛躍的に向上させることもできた。GP02Aの設計者たちは、ならば、4本の腕や足が6本になっても問題はないのではないだろうか、と考えたのだ。つまり、推進や機動のための専用ユニットを付帯させることで、MS本来の運動性を損なわず、充分な機動性を確保するユニット。それがフレキシブルスラスタバインダー（以下FTB）である。

FTBは、機動性確保のために特化されたもう一対の腕（あるいは脚）だと言える。MSに装備されるバーニアやスラスタは、基本的に機体の可動範囲以外に作用点を持たないが、FTBは機体の行動に制限されずに機体を機動することができる。根本的な発想はGP01Fbのユニバーサルブーストポッドと同様のものだが、その効果は遥かに膨大なものである。実際、FTBを展開した場合、両端のスラスタの作用点は機体そのものの全長を上回り、その圧倒的な推力による方向転換や加減速は、GP01Fbに匹敵するほどのものであった。この機動性は既存の強襲型MSにも充分比肩できるもので、その意味でこのGP02Aは、その自重や主武装の如何に関わらず、MSとしての基礎機能を何等損なうことなく、十分にアグレッシブな機体となることができたのだと言えるだろう。

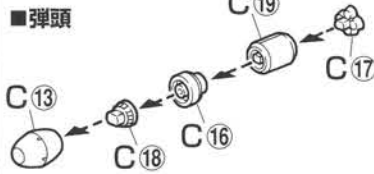
この装備の有効性は画期的なものであり、後のMSにも様々な形を変えて継承されている。U.C.0085年以降に開発された高性能MSの多くが四肢他に“能動”する機動装置や可動肢を備えているのはそのためである。



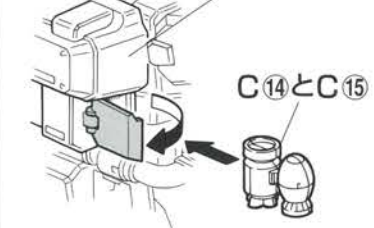
■ビームサーベル ※2組作ります。



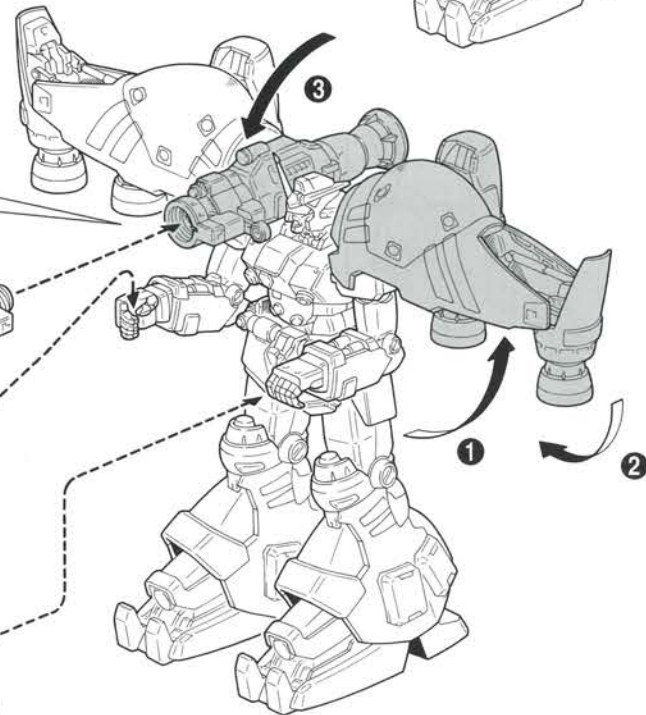
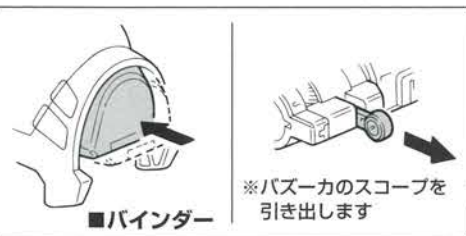
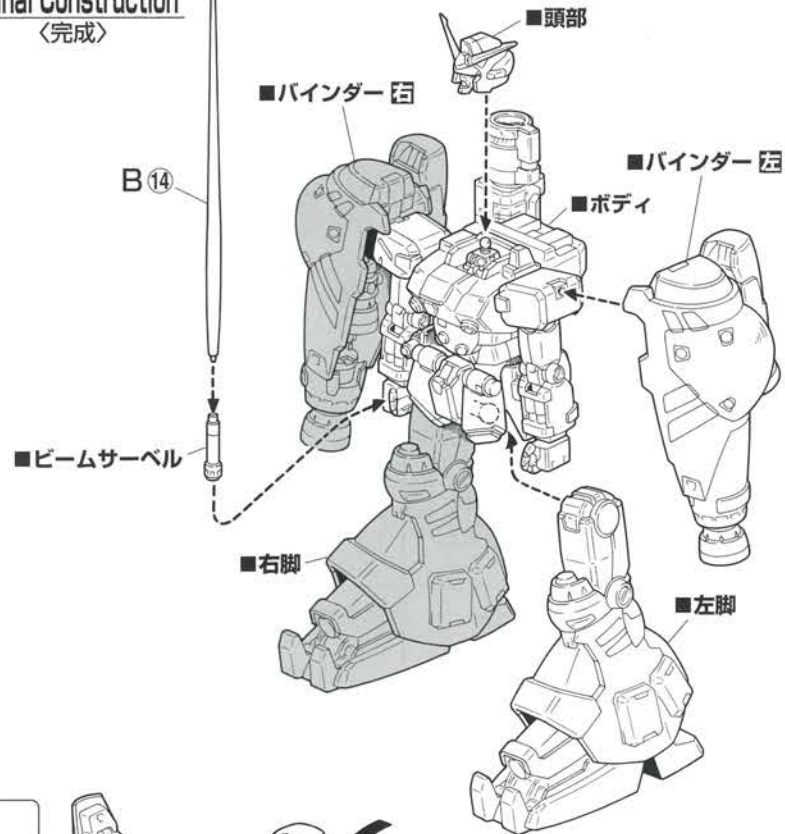
■サイドアーマー



■バックパック



16 Final Construction
<完成>



- ① 両肩のバインダーを上上げます。
(サブスラスターはそのままにします。)
- ② メインスラスターを下に下げます。
- ③ バズーカを前に倒します。

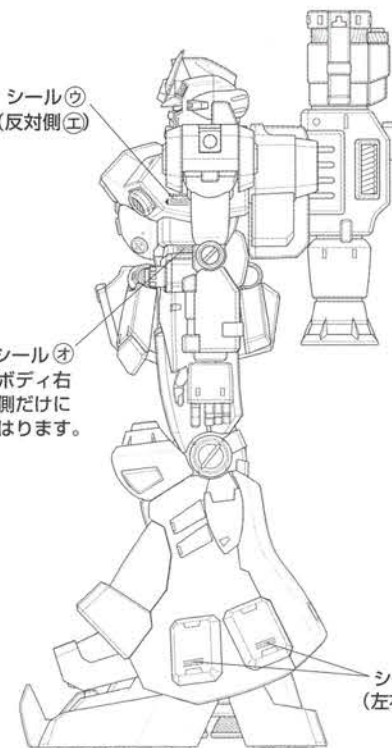
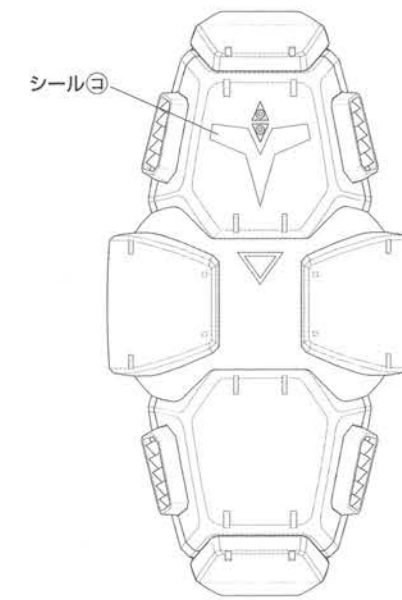
※A13や弾頭は、好きな所に飾ってください。

Seal
<シール>

下の図を見て、ガンダムデカールやシールの
はる位置を確認してください。

ガンダムデカールのはりかた。

1. 転写するマークを大きめに切ります。
2. 転写する場所に軽く押さえ、ボールペン等の先の丸い物で上から軽くこすりつけます。
3. シート部分を静かにはがし、転写していない部分があれば、もう一度転写していない部分をこすります。



※余ったマーキングシールやガンダムデカールは好きな所にはってください。

